

カシュルートーユダヤの食物規定

ジョナサン・マゴネット

要旨

本稿は、ユダヤの食物規定について、3つの観点から検討する。a.どの動物が食べることに容認もしくは禁止されているかを分類する聖書の法、そしてこれらの儀礼的な区別の背後にあるのかもしれない原理的説明の理解に関する近年の試み b.「カシュルート (*kashrut*:ユダヤの食物規定)」のシステムに関する後のラビによる拡大と整理と、それらを維持することの責任という重責が、いかにして地域共同体(資格を備えた儀礼的屠殺者の供給)や、私的な家庭的領域(食物の準備および分けられた家庭用品)へと移行して行ったのか c. 伝統的なユダヤの宗教的实践への遵守に対する、18世紀に始まったヨーロッパにおけるユダヤ人の解放という衝撃である。近代にはまた、しばしば反ユダヤ主義的な政治活動と関連した、動物権利擁護団体による、ユダヤの儀礼的屠殺の伝統的実践への外部からの脅威の台頭が確認されている。

キーワード

ユダヤの食物規定(カシュルート/*kashrut*)、ユダヤの儀礼的屠殺(シェヒタ/*shechitah*)、ラビの権威、ユダヤ人の解放、動物の権利

聖書の食物規定

私はこの主題について、3 つに分けてお話ししたいと思います。最初に、ユダヤの食物規定に関する聖書の典拠について、次にラビ・ユダヤ教におけるそれらの相当な拡大について、最後に今日のユダヤ世界内外からの「カシュルート (*Kashrut*)」への挑戦についてです。

語根 *kashar* は、ヘブライ語聖書ではほとんど出現せず、後期の書物において現れますが (エステル記 8:5、コヘレトの言葉 10:10、11:6)、そこでは、何かが「都合が良い」、もしくは「適切である」ことを意味します。ラビの時代においてそれは、ユダヤ人が食べることが許されたすべての食物を分類することに使用されます。肉の場合、その動物は適切なカテゴリーに属し、そして正しい儀礼的手法に則って屠殺されなくてはなりません。後の時代において、「コシエル (*kosher*)」 (アシケナジー (東欧) による *kashar* の発音形態に由来) は、ユダヤの食物規定に適合し、食するのに「適切である」食物を意味するようになりました¹。カシュルートという用語は、ユダヤの食物規定の集合体を示す際に用いられます。

しかしながら、聖書の食物規定に関して言えば、ヘブライ語聖書には、何故ある動物のみが神に捧げられたり、あるいはイスラエル人が食したりすることが容認されると見なされるのか、また、何故その他のものは禁止されるのかに関して、説明はありません。それらを分けるために用いられる用語は、前者は「清浄」や「純粹」を意味する「タホール (*tahor*)」であり、後者については「不浄」や「純粹でない」ことを意味する「タメイ (*tamei*)」です。これらの用語の意味は、儀礼的な目的のためだけの、それらの「純粹さ」に限定されています。記録されているのは、どの動物がどのカテゴリーに属するかというリストのみです。

主はモーセとアロンにこう仰せになった。イスラエルの民に告げてこう言いなさい。地上のあらゆる動物のうちで、あなたたちの食べてよい生き物は (レビ記 11:1-2) ²

それ故、どのような原理的説明が、神への捧げ物のため、そして共有される食事のために、それらの動物たちが適切かそうでないかの指定の背後にあり得るのかについては、推測を余儀なくされます。その提案は、健康や衛生などの実際的な問題から、倫理や道徳的な価値の推進、生態学的そして経済学的な説明、周囲の人々から区別される文化的アイデンティティの保持、そしてその他の未知の、もしくは祭儀の内的要求までの多岐に渡ります。これらすべては、部分的な説明は提供しますが、いずれも十分に包括的なものではありません。以下は、聖書テキストに関する近年の研究において探究されてきた、可能性のあるいくつかの潜在

的な原理の概観です。

創世記は、このトピックに関係する創造物語から、2つの情報を提供します。まず第1は神の原初の意図であり、創世記1章によれば、人間は菜食であるべきだということです。

見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。(創世記 1:29)

神が洪水に引き続くノアとの契約の一部として肉食への許可を与えたのは、エデンの園からの追放や人間の行動に関する神の関心に引き続く、その後の段階になってからのことであり、それはおそらく人間の本性の弱さへの配慮としてです(9:1-17、特に3節)。ここには既に、すべての生命、人間、そして動物の聖性を強調しながら、血を摂取することを禁止する条件が含まれています。これは、動物の屠殺がどのようにしてなされるべきか、また、食するための肉を準備する際に何がなされるべきかについての後代の法に影響を与えるものでしょう。

情報の2つ目は、より間接的です。神は自らが創ったすべての生き物をアダムの前に持ってきて、アダムはそれらに名前を与えました。このことは、「清浄」もしくは「不浄」のどちらかと考えられる動物の詳細な分類化を既に予期するものです。これらの決定について理由は与えられていませんが、経験的に認識された判断基準に一致する分類化に関する、洗練された基礎的システムを仮定するものです。

これら2つの観察は、神に対する犠牲や、聖書におけるイスラエルの人々の食物のために容認されている、地上の動物に関するひとつの明確なカテゴリーを定義する上で、一体となっています。それらは、2つの特徴、ひとつは肉体的な(ひづめが割れていること)、そして他方は生物学的な特徴(反芻すること)によって、厳密に分類されています。双方の特徴が要求されていることは、2つの目的に合っています。まず、それは、容認された動物が反芻動物であることを確実にしますが、それはつまり、彼らが草食ということです。このことは、動物を食することへの容認にも関わらず、少なくともイスラエルの人々に関しては、人間は菜食であるべきという神のもともとの意思と一致するための試みが示唆されていて、それは非直接的ではあるものの、彼らの食物をこのように制限することによって示されています。バルーク・リーバイン(Baruch Levine)が表現するように、これらの容認された動物を摂取することは、「食物としてイスラエル人に禁止されているものは〈その〉動物自身によって摂取されていない。(中略)理想的には、人間は大地の産物によって支えられるべき」³ことを確かにするでしょう。

「清浄な」動物であることの定義の厳格さは、必要な2つの特徴の内、1つしか備えていないものの排除によって強調されています。例えば、ラクダ、岩ダヌキ、野ウサギなどで、彼らは反芻食塊を咀嚼しますが、必要とされる割れたひづめは持っておらず、禁止されています。翻って豚は、割れたひづめを持っていますが、反芻は行わず、同様に禁止されています。このことは、その画期的な著書である『汚穢と禁忌』⁴において、文化人類学者メアリ・ダグラス(Mary Douglas)によって探求された、可能性のある第2の潜在的な原理を指摘します。食物規定は、「ケドゥシャ(kedushah: 聖)」という聖書の 카테고리において示され、その声明は神によって特に述べられるように、イスラエル人が熱望すべき状態なのです。

あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。(レビ記 19:2)

ダグラスは「聖」を2つの意義、すなわち分離と全体性に等しいとしました。この後者は、神によって創造された世界の中で認められたカテゴリーに自らを位置づける要求と、境界を横断するように思われるものすべてと関連しないことを含んでいます。このことは、混交を許容しないことに関する法でも反復されています。2つの異なる動物を交配させることや、畑に異なる種類の種を蒔くことは禁じられています(レビ記 19:19)。加えて、申命記(22:9-11)は、牛とろばを一緒にして耕すこと、2種類の材質の混合からなる衣服を着ることなども添えています。

しかしながら、境界を横断することへのこの関心は、宇宙的な次元を持っています。レビ記と申命記における、容認された、そして禁止された動物のリストは、生物を彼らの住む場所が地上か、海か、空かによって分類しています。ここで彼らは、創造物語において神によって確立された3つの領域に従っています。アーノルド・エイジス(Arnold Ages)はダグラスの発見を次のように要約しています。

ダグラスは、許された動物は、分離と全体性という律法の考え方と一致する、草食性の非捕食者であると述べる。彼女が加えた特別な改善点とは、許された動物は、彼らの環境(生息地)に本来的な移動形態を使用するものであるということである。このパターンからのあらゆる逸脱は、いわば、彼らをコシエルの流れの外へと置くのである。2本足の鳥は、翼で飛ばなくてはならない。うろこのある魚は、水の中を泳がなくてはならない。地上では、4本足の動物は跳んだり、跳ねたり、歩いたりする。「これらの活動領域本来の運動能力を具えていないような動物の種族は、聖潔に反するのである」

(ダグラス、144 頁)。言い換えれば、種の間にある境界を横断する生き物は、コシエルではないのである。…このものは、境界を確定する、明瞭に定義づけられた境界線を横断するのであり、それ故、彼らはコシエルでは無い。動力形態が曖昧なあらゆるもの一群れるもの、腹ばいで進むもの、這うもの、滑って進むもの—は、コシエルのカテゴリーからの資格喪失をもたらす。「ウナギやヒルの類は水中に棲むがそれは魚ではない。爬虫類は乾いた土の上を進むがそれは4足獣ではない。昆虫には飛ぶものもあるがそれは鳥ではない」。(ダグラス、146 頁)⁵

しかしながら、さらなる分類もまた、禁止されるものとして明確に位置付けられている動物については影響しているかもしれませんが、それらが捕食動物や清掃動物だからです。リーバインの分類に従うのであれば、彼らを除外し得るのは、単純に、菜食を超えた彼らの食物の範囲です。しかしながら他の次元もあり得ます。後にイスラエルがそうになっていくところの民族の先祖としてのアブラハムを考えた時、どの子孫が祝福と使命を担うのかという問いが、それぞれの世代に関して生じます。イサクは、争う者として運命づけられたイシュマエル(創世記 16:12)と置き換わります。天幕の居住者であるヤコブは、狩猟者であるエサウに優先して選ばれます(創世記 25:27)。その選びのプロセスは、暴力的な活動に魅了された者を除外します。容認される食物の選択は、おそらく、「あなたはあなたが食べたもので出来ている(you are what you eat)」という考え方を反映するものであり、また、イスラエルの人々をある種の牧会的な、そして家庭的な価値に責任を有する者として条件づけるための更なる構成要素であるのです。

容認された、そして禁止された食物のこれらのリストに加えて、聖書の他の個々の多様な節や項が、食物に関連した条件の要件を導いています。その多くが、新しい穀物や果実の樹を植えること、そして、いつそれらが神殿に運ばれるべきで、いつそれらを食べて良いのかという問いに関連しています。その顕著な例がレビ記 19:23-25 です。

あなたたちが入ろうとしている土地で、果樹を植えるときは、その実は無割礼のものに見なさねばならない。それは3年の間、無割礼のものであるから、それを食べてはならない。4年目にすべての実は聖なるものとなり、主への賛美の献げ物となる。5年目にあなたたちはその実を食べることができる。こうすれば収穫は増し加えられる。わたしはあなたたちの神、主である。

最初の3年間の果実の利用に関する禁止は、確かに果実の樹の理想的な栽培に関する、経験的な知識に基づいていることもあり得ます。しかし、4年目の実践は、それはラビの伝統では祭司への果実の奉獻として理解されますが、事実上、神が果実の源であることの確認であり、その産物の所有権を神から人間の領域に移すことを示すものです。すべての食物が神に由来することを公的に認めることによってのみ、それを利用することが許されるのです。後のラビの教えでは、飲食に際しての祝福の朗誦に対して、同じロジックを適用しています。祝福は、食物の「聖別(sanctify)」ではなく、むしろ、それを「脱一聖別(de-sanctifies)」することです。その源が神にあることを承認することによって、それにあずかることを許されるのです(バビロニア・タルムード ベラホット(b. *Berakhot*) 48b)。

他の法が、その現実的な意味とそれを実行するやり方の両方について、困惑をもたらしています。それは3回確認されます(出エジプト記 23:19、34:26、申命記 14:21)。テキストは次のように記しています。「子供をその母の乳で料理してはならない」。このテキストは字義どおりに読むことができますが、そのことは、根拠は無いものの、異教徒の儀礼への矯正策であるかもしれないことを示唆します。しかし、同様にありそうな強調が、それを、「その母親の乳をまだ飲んでいる間、その子を母親から取り上げてはならない」とも示し得るのであり、それはそのテキストを、動物に対する残酷さのカテゴリーに置き得るかもしれません。このことは、それをレビ記 22:27-28 に直接的に結び付けるかもしれません。

牛、羊、山羊が生まれたときは、7日の間その母親のもとに置きなさい。8日目以後は主に燃やしてささげる献げ物として受け入れられる。あなたたちは牛または羊を屠るとき、親と子を同じ日に屠ってはならない⁶。

しかしながらその節の3度の反復はそれを、我々が以下において検討する、ラビの主要な食物規定法における重要な聖書の証明句としています。

食物規定に関するラビの解釈

ヘブライ語聖書の正典化は、ユダヤの人々の状況における根本的な変化への応答の一部です。そのプロセスは、バビロニアによる征服に伴って人口の大部分が最初の捕囚となったこと、そしてそれに続く、ペルシャ帝国下の国家再建に始まるものでした。国土や政治的な自律性、そして犠牲奉獻の儀式の喪失を伴う捕囚という経験は、国民的アイデンティティの感覚を保持するための、代替的な政治的、精神的体系の創造を導きました。その展開は、ローマによるエルサレムや第

二神殿の破壊、そしてこの世界の隅々への人々の離散に伴い、更に進展しました。後者は、ヘブライ語聖書に正式に記された、モーセが成文律法を受領したのと同時に、シナイ山でモーセに与えられた口伝律法の伝統にその権威を置く、ラビのリーダーシップの発展と一致しています。ラビたちは彼らの「伝統の鎖(chain of tradition)」を、それ以前、社会を支配していた祭司のエリートと王族を特に排除しながら、以下のように記しています。

モーセはシナイ（で神）から律法を受け、これをヨシュアに伝え、ヨシュアは長老たちに、長老たちは預言者たちに、預言者たちはこれを大会堂の人々に伝えた。彼らは 3 つのことを語った、「慎重に判断をください。多くの弟子を興しなさい。律法に垣根を設けなさい。（『ピルケ・アボット(Pirque Avot)』 1:1)

神殿の破壊と、国家と個人の神との関係を維持する中心的な手段としての犠牲儀式の終焉の結果、ある急進的な変容が生じました。シナゴグが捕囚の共同体にとっての統合の核心として出現し、その役割は、ベイト・ミドラッシュ(Beth Midrash)「学びの家」、ベイト・テフィラー(Beth Tefillah)「祈りの家」、ベイト・クネセット(Beth Knesset)「集会の家」という 3 つの称号に例証されます。神の直接的な言葉としてのヘブライ語聖書は、ユダヤの法という事柄に関するその後すべての発展における権威的な源になりましたが、しかし、ラビによって発展され、権威づけられた口伝律法の伝統を通して仲介され、解釈されました。シナゴグでの礼拝のすべての中心とは日々の祈りであるアミダー(Amidah)であり、それは、回復された神殿や王国とともに、その国土に民族が回復することの懇願によって最高潮に達します。しかし、シャバット(Shabbat：安息日)、祭り、1 週間に 2 度行われるシナゴグの中心的な儀礼とは、ある時には預言書からの引用が付随するトーラー(Torah：律法)、モーセ五書からの読誦です。この五書からの朗読はしばしばある種の説明的な教えを伴います。このように、祈りと研究が、犠牲を献げる祭儀の代替物となりましたが、にも関わらず当初は、神殿がいつの日にか回復されるまでの一時的な手段として意図されていたのです。

しかし、犠牲の祭儀はそれ自身完全に消滅した訳ではなく、むしろそれは民主化され、「家庭的な」ものになり、祭司の役割にとって代わって、父が家族のテーブルにおける責任者となりました。食物規定がその急進的な変容と拡張を遂げたのは、この文脈においてであり、それらを維持する責任は、それぞれの家庭の責務となりました。

ラビたちは、聖書の記録からは同定するのが難しいか、あるいは受容の可否が

きわどい動物たちについて議論しましたが、動物に関する容認と禁止のリストは変わらず存続しました。おそらく、ユダヤ人の食物規定において最も良く知られている要素は、豚や豚製品を食べることの禁止です。しかしながら、食べることの可否に関する制限の数や幅は、ある者が遵守するところの伝統的なユダヤの信仰や実践の程度に左右されながら、相当に増大しました。

専門職の祭司によって維持される犠牲儀式の欠落によって、動物をいかに屠殺するかという問題が主要な関心事となりました。申命記 12:21 は、「神があなたに命じたように」、ある状況下においては彼ら自身の動物を人々が屠殺することを許容しています。しかし、命令の詳細はヘブライ語聖書には記されていないので、それらは口伝律法によって与えられたと理解されます。實際上、「シェヒタ (shechita : 儀礼的屠殺) の法」は非常に複雑なものになり、訓練を受け、資格を取った個人、「ショフェット (shochet : 屠殺者)」のみがそれらを実施できました。屠殺の施行においては、その動物に適切なサイズのものとして選ばれた、欠けの無い、鋭利な特別なナイフの一閃により、首周辺の気管や食道、大動脈を切断します。脳に向かう血液が速やかに失われることで、動物の苦しみを最小限にするという意図が達成されます。それから肉は、食物規定によって要求されている、消費を不適切とさせるような欠点について検査されます。それに加えて、必ずしも消費されない身体の部位が 2 か所あります。創世記に示される、脂肪の或る箇所と血です。血の除去は、その時に、もしくは家庭に運ばれてから、焼くか塩漬けにするかによって実行されます。しかしながら、相当量の血を含んでいる肝臓には、特別な扱いが要求されます。

更なる要求もまた、聖書の物語に基づいています。父祖ヤコブが、神の御使いと夜通し闘った時、最後に脚を引きずりましたが、テキストは次のように締め括っています。

こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。(創世記 32:33)

このことは、その部位がコシエルとして容認される前に取り除かれねばならない坐骨神経について言及しています。しかしながら、この部位の切開の難しさは、特別な訓練を必要とします。もしそれが引き受けられない場合、その動物の後軀は、非コシエルの肉市場で販売され得ます。

どのような生物についてもその生命を取ることは重大な事柄であって、軽々しく着手されるべきでないことの再確認として、「ショフェット」は彼が屠殺を行う

前に以下の祝祷を朗読します。「主なる我らの神よ、あなたは祝福されよ、宇宙の至高者よ、その戒めによって我々を聖とし、「シェヒタ」に関して我々に命じる者よ」。

動物の実際の屠殺は専門者の手に委ねられるが、コシェルと考えられる食物を用意する技能は、家長が注意しなくてはならない要件によっても条件付けられます。この複雑さの最も良く知られた例は、1度の食事において肉と乳を同時に食べることの禁止です。この禁止の源は知られていませんが、ラビは、子供をその母の乳で調理しないことに関する既出の節の3度の反復にその根拠が置かれる、聖書上の理由を見出しました。彼らは、3度の反復から、3つの禁止を導きました。すなわち、肉と乳と一緒に料理すること、そのような混交を食すること、そしてそのような混交からどのようなものであれ、利益を得ることです。しかしながら、この点においては他の原理もここに関わるようになり、それは、上述のピルケ・アボットの引用に示される、「律法の周りに垣根を造る」というものです。このことは、ある特定の法を破ることの回避のために、このような出来事の発生を予防するため、他の法がその周りに「垣根」として造られなくてはならないことを意味します。それ故、乳と肉のいかなる混交も起こりそうになくさせるために、分けられた家庭用品、食器類、フォークやスプーンなどが乳や肉の製品のために用いられ、それらは分けて洗われ、保存されます。過越祭においては、食物への追加的な配慮がなされ、酵母入りのパンもしくはその派生物を食べることの禁止が結び付けられ、更なる器具が使用されます。これらの配慮は一般の販路で購入可能なあらゆる食物に拡張され、そのため、〈法を〉遵守するユダヤ人がそれらを食べる際に安心できるよう、「コシェル」として食材の作成を「監督」し、それらを保証する総合的な産業が存在します。明らかに、禁止をより厳密に受け入れようとすると、ユダヤ人ではない家庭やレストランで食事をするのはより困難になるのであって、分離されたユダヤ人の存在を維持しようとする意志がそれらの背後にある理論的根拠の一部であると、ある者は主張するかもしれません。

食べること自体に関しては、それぞれのユダヤの伝統にも拠りますが、肉は消化に時間がかかるので、最大6時間が経過する必要があります。反対に、乳製品の摂取後は、最大1時間が求められます。

以上は、ユダヤの食物規定の複雑さの表面に触れたに過ぎません。例えば、昆虫を食べることは、聖書のリストから厳格に禁止されているので、全面的に容認されている野菜に昆虫のわずかな侵入を含んでいる場合、どうなるのか？ラビの議論は、単に裸眼で確認できるものを除去するだけで良いのか、あるいは、完全に確かなものとするために光学式の機材を使用すべきかについて、検討しています。逆に言えば、もし、食物がその食物全体の60分の1未満に過ぎない禁止され

た何かによって汚染された時には、その存在を無視し得る、おそらく他のラビ的な原則が援用されるべきであり、その汚染は無視され得るのです。それにも関わらず、考え得るそれぞれの野菜の完全な洗浄のための精巧で複雑な要求が、ラビによる権威によって列挙されています。現実的に表現されている真の敬虔さと、潜在的な危険性への偏執性との間には、明らかに境界線が存在します。

近代という衝撃

食物規定は、初期のラビの時代においては、ユダヤの共同体が閉じたシステムの中に存在し、ラビの権威によって導かれ、また、より広い社会とは基本的に独立していたので、それが内面的で、主として内部的な問題だった時には、効果的に機能していました。最初の数世紀には、地域の共同体は、ラビの学びの地域的中心や裁判所によって提供される導きやある時には判決によって、彼ら固有の伝統や慣習に従う傾向にありました。中世になって、ユダヤ法の法典編集が、起こり得る新しい問題に対処するための、指導的立場のラビからの「レスポンス (*responsa* : 回答状)」とともに生じました。しかし、印刷技術と、固定化された法の集積が予め利用できることによって、初期には存在していた柔軟さの大半がそのシステムから失われ、近代の出現によって強められた傾向と、世界におけるユダヤ人の立場への政治における急進的な変化がありました。

もし、聖書の食物規定が何らかの象徴的な解釈に影響されやすいものであるなら、食物規定に関するラビの展開は、彼らが神によって命令されているという一般的な見方に包含される傾向にあったので、深刻に疑問視されることはなかったでしょう。このことはまた、そのシステム自体に変化を起こさせることは、そのような問題を究極的に支配するラビの権威に対して衝突するため、非常に難しかったことをも意味します。ラビとその制度は、地域的なものであっても、国家的なものであっても、あるいは国際的なものであっても、彼らの独立を重んじていたので、宗教的な議論はまた、政治的な次元とも結びついていました。さらに、イスラエルの国家としての存在と、それが正統なラビの職務に認めていた権威は、後者に、離散にある保守的なラビの共同体の権威に関連する政治的権力という追加的な次元を加えました。しかしながら、そのような係争点のすべては、ヨーロッパの啓蒙主義と解放の覚醒の中で、ユダヤのアイデンティティと共同体の性質の変化に接して、現実的な問題となりました。

ヨーロッパのユダヤ共同体にとって政治的な解放は、ユダヤ人であることの制約の緩やかな除去と、十全な市民権や平等、権利を与えられた者としてのユダヤ人の承認を意味しました。18世紀後半の初め、それはユダヤ人に個人として、彼

らの社会に同化することを可能にしました。このことは効果的に、厳格なラビの権威の下でのユダヤ法によって統制された、社会の中の社会という閉ざされた内的世界としてのユダヤ人の生活をこじ開けました。その結果、ユダヤ人は、ユダヤ教に全面的に自己同一化するか否か、より広い世界に同化するか否か、もしくはこれらの両極端間の折衷的位置を見出すかを選ぶことが出来るようになりました。さらに、ユダヤ教は民族意識と宗教との複雑な混合であるので、ユダヤの法の枠組みを無視することを選択しながら、家族、歴史、政治、文化などの理由から、ユダヤ人として自己同一視することが可能になりました。この状況にあって、ユダヤの法的伝統において不可欠なユダヤ的価値と彼らが考えるもの以外のすべてを事実上解体した者から、伝統的な実践を完全に保つことを維持することにコミットする者までの、宗教的に多様な動きが生じました。異議を申し立てられた法の中で、複雑な食物規定は、より広い世界に統合するための探究の中で、ユダヤ人によってしばしば真っ先に放棄されました。それを行うための理由は、その不便さと費用ということから、それらを守るための受容可能な原理的説明の欠如にまで及びました。おそらく今日、この領域におけるもっとも大きな問題点は単純に食物規定への無関心ということです。逆説的に、そのことはさらに、単なる「生活様式」の問題として、そしてユダヤの文化的アイデンティティの微かな指標として、コシェルもしくは「コシェル・スタイル」の食物を、進んで時々、もしくは定期的に食することにまで及んでいます⁷。

しかし、ユダヤの食物規定がユダヤ人のある者にとって相対的にほとんど関心の無いものだとしても、それにも関わらずそれらは正統派のユダヤ人の核心的な実践の中心を表現するのであり、そして、修正された、しかし同様に義務付けられた〈食物規定の〉見解においては、広範な非正統派の宗教的スペクトラムに位置するユダヤ人においてもまたそうなのです。それ故、積極的なユダヤ的生活にとって、カシュルートの中心的な面が、儀礼的な屠殺である「シェヒタ」の実質的な過程についての関心によって特別に動機付けられた個人や集団からの攻撃下にあることは、非常に深刻です。彼らは、それによってコシェル（そしてしばしばハラールと平行しますが）の肉が屠られる方法が、動物への著しい苦痛や苦しみを引き起こすので禁止すべきだと主張します。動物の福祉に関わる団体は、動物は屠殺の前に気絶させるべきだと主張しますが、それは物質的な損傷を与え得るので、ユダヤの法にとっては受け入れ難く、その結果、その動物を不適合とし得るのです。研究と実験は全体として、ユダヤの方法が実質的に無痛であるという主張の根拠を示していますが、逆に、事前に気絶させるような方法はこの点において絶対確実とは言えません。さらに、屠殺前の動物の扱いや示される配慮もまた、苦痛の程度について重要な要素です。そのような批判に対するユダヤ側か

らの一つの応答は、特にアメリカの保守派(American Conservative)や再建派(Reconstructionist)、ユダヤ教革新運動(Jewish Renewal Movements)における、「エコ・カシュルート(eco-kashrut)」という概念の推進です。この用語はラビ・ザルマン・シャフテル＝シャロミ(Zalman Shachter-Shalomi)に帰されるものであり、ユダヤの主流的生活への環境問題導入の一端です。このように、動物が飼育される方法、食料生産に関わる人間と環境的なコストは、どの食べ物を食すのか、どのような価値がコシエル食の一部であるのかが決定される時に、考慮に入れられなければならないのです。

解放の結果としての市民や共同体の権利は、2000年間のキリスト教の教えによって影響されたヨーロッパ社会における反ユダヤ主義の終焉を意味しませんでした。そうではなく、20世紀初頭においては、経済的、社会的、政治的な情勢の変化の中で、新しい種類の人種的反ユダヤ主義が出現しました。それはドイツにおけるナチスの台頭において最高潮に達し、結局、ホロコーストで600万人のユダヤ人が死亡しました。1880年代、反ユダヤ主義的な政党は、スイスやドイツ、スカンジナビア半島でのユダヤの儀礼的屠殺を禁止する法律制定のキャンペーンのため、動物保護団体と結び付きました。そして、20世紀の間、異なる国々の異なる環境が、ノルウェイ、アイスランド、デンマーク、ラトビア、エストニア、そしてフィンランドにおいて、屠殺の行為やそれに関連する準備に先立つ気絶の要件の命令による、シェヒタの禁止を導きました。EUの指示である、「屠殺に関する動物保護のヨーロッパ協定」(1998年)は、概して、屠殺前に気絶させることを要求しましたが、しかし、宗教的な屠殺に関しては、メンバーに免除を許す地位を容認しました。「それぞれの締約国は、以下のようなケースでは、事前の気絶に関する準備から一部修正を認めることが可能である。宗教的儀礼に一致した屠殺…」。しかし、この数十年、ユダヤとムスリム双方の⁸、ヨーロッパ諸国でのあらゆる形態の屠殺を禁止する試みが増加しています。ユダヤの観点からは、ユダヤの記念碑や建築物、そしてユダヤ人への攻撃と同時に発生している、ヨーロッパの反ユダヤ主義の新たな潮流の更なる表出をこの中に見て取ることは困難ではありません。さらに、ユダヤ人は、このことは割礼のような宗教儀式を実施するための権利や、また、全体としてユダヤの人々にとって生活を困難にさせる攻撃の幕開けでしかないのではないかと、特に心配しています。しかし、より広範な観点によれば、ヨーロッパ諸国における移民数の伸長と、新しい、そして成長中の国家主義的な政治的動向、そして同時に起こっている反ユダヤ主義とイスラム恐怖症に関連した、より広範な関心や先入観に属しているのです。

終りに

ユダヤの食物規定は、各々のユダヤ人がそれを遵守している程度に関わりなく、ユダヤの宗教的、組織的な生活において鍵となる支えを代表しています。それらは、物質的・霊的、個人的・集合的な生活のすべての面に関して、一貫性を備えた全体性のある部分として見なすことを求めるユダヤ教の特徴の一部です。その最高の状態において、それらが我々の食習慣に課す戒律を別にすれば、食物規定は「ツァアル バアレイ ハイーム (*tza'ar ba'aley chayim*：動物の苦しみ)」のような食事の原則に体现され、命を奪うという極限的な状況においても、動物への不要な苦しみを避けています。おそらくそれらの中には、許された動物を選ぶということが、ユダヤの人々における内的な、そして牧会的な価値観を物質的に体现する試みの一部であるという理念の残響があるのです。さらに一般化すれば、食事前後の祝祷の伝統的な暗誦は、我々に与えられている食事、直接的、非直接的にその収穫を産み出している大地、そして、我々がどのように想像しようとも我々を支えている生命の源、これらを決して当たり前のもと見做さないことを常に想起させるものなのです。

訳者：北村 徹（同志社大学一神教学際研究センター特別研究員）

※1 〈 〉は訳者による補足を示す。

※2 聖書の邦訳は、共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』日本聖書協会、2018年による。

※3 69頁の『ピルケ・アボット』の訳文は、石川耕一郎訳『ミシュナ・アヴォート ホラヨート』、エルサレム宗教文化研究所、1985年、9頁からの引用である。

注

¹ 「コシエル」という言葉は、法的文書から、誠実な商業的取引まで、適当な、もしくは適切であるあらゆるものに適用されるありふれた語法として、一般化された。

² 動物に関する容認と禁止の主要なリストは、レビ記 11:1-47 (20:24-26)、そして申命記 14:3-21 に記されている。

³ Levine, Baruch A., *The JPS Torah Commentary: Leviticus*. Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1989, p. 247-248.

⁴ Douglas, Mary *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo* (London, Routledge and Keegan Paul, 1984). (訳者注：邦訳はメアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』塚本利明訳、筑摩書房、2009年による。)

⁵ Ages, Arnold 'The Subtle Grammar of the Biblical Dietary Laws' *Jewish Bible Quarterly* Vol 30, No

-
2. 2002. (訳者注：ダグラスの引用箇所は、原文ではそれぞれ p. 50 と p. 51 となっている。)
- ⁶ それはまた、申命記 22:6-7 の同様の法にも属しているかもしれない。6. 道端の木の上または地面に鳥の巣を見つけ、その中に雛か卵があって、母鳥がその雛か卵を抱いているときは、母鳥をその母鳥の産んだものと共に取ってはならない。7. 必ず母鳥を追い払い、母鳥が産んだものだけを取らねばならない。そうすれば、あなたは幸いを得、長く生きることができる。
- ⁷ 参照、Shannon Leavitt ‘How is Jewish Identity Manifested through Food?’ (University of California Santa Barbara). <http://www.writing.ucsb.edu/sites/secure.lsit.ucsb.edu.writ.d7/files/sitefiles/publications/2013%20Leavitt.pdf>
- ⁸ 異なる国々における「反シェヒタ」の立法の概観については、https://en.wikipedia.org/wiki/Legal_aspects_of_ritual_slaughter における‘Legal aspects of Ritual Slaughter’の論文を参照。儀礼的な屠殺の諸段階に関する実践的な問題とそれに関連する立法のより詳細な概観については、http://www.izs.it/vet_italiana/2017/53_1/VetIt_910_4625_2.pdf の‘Shechita (Kosher Slaughtering) and European Legislation’ Paolo S. Pozzi and Trevor Waner, *Veterinaria Italiana* 207, 53 (1) 5-19 を参照のこと。